



# 全日本クラシックカメラクラブ研究報告

## From VEST to CINE

### — 1930年代の流行り廃り —

会員番号: 0723 湯浅 謙

日時: 2011年9月10日

於: 日本カメラ博物館(JCII)ビル6階会議室



写真1 ゲヴィレットとエディネックス

ドイツのカメラ業界では、1930年代の前半に大きな潮流の変化が見られた。1925年発売のライカを契機として、カメラの小型化、ボディの金属化が始まったのである。

感材の進歩と引き伸ばし機の導入により、シネ倍判(24×36mm)のネガから実用的な写真が得られることが解ったものの、マガジンに生フィルムを装填する暗室作業が不可欠だった。そこで登場するのが、ベスト半截、通

称ベビー判である。3×4cmの画面サイズは、シネ倍判サイズに近似である。裏紙付なので日中装填が可能なのが強みである。

しかし、1934年、コダック・レティナとともに発売されたパトローネ入り35mmフィルム(135)の出現とブローニ(120)半截判カメラの登場で、ベスト判フィルム(127)はその役目を終える。

#### ツァイス・イコンの動き —初の半截判—

1930年、ドレスデンのツァイス・イコンは、ベスト半截判のコリブリ(523/18)(写真2)を、引き続き、翌1931年、同じベスト半截判のイコンタ(520/18)(写真3)を発売する。シネ倍判のコンタックス(540/24)が登場する一年以上前のことである。縦走りフォーカルブレン・シャッターにこだわった技術首脳は、廉価版のスーパー・ネットル(536/24)にもリーフ・シャッターを採用しなかった。ツァイス・イコンから全金属製ボディでリーフ・シャッター付のシネ倍判カメラは、戦前に発売されることはなかった。

ツァイス・イコン展を担当して知ったことの一つは、プレート・カメラやロールフィルム・カメラの立ち姿が縦長で、撮影画面も縦長だったことである。当初の撮影ターゲットが人物、つまり肖像写真だったことに由来するものと考えられる。ところが、半截判の採用でこのバランスが崩れた。縦長ボディでは撮影画面が横長になってしまう。コリブリもベビー・イコンタも立ち姿は縦長で撮影画面は横長である。縦位置撮影ではボディが掴み難い。



写真2 コリブリ: 沈胴式のレンズ・シャッター部分と全金属製の革張りボディが特徴。シャッター部分には取外し可能な前足が付く。



写真3 イコンタ(520/18): 通称ベビー・イコンタ。従来通りのセルフエレクティング(スプリング)カメラ。



写真4 パルヴォラ ベスト判・名刺判兼用型。シャッター・スピードの指標の位置に注意。

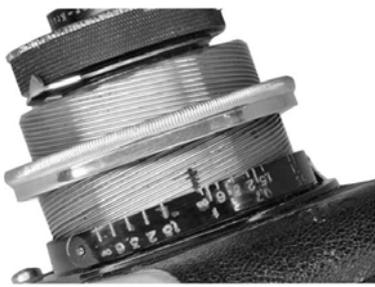


写真5 パルヴォラ 兼用型では感光面の位置が違うので、距離目盛は二つある。



写真6 パルヴォラ ベスト半截判用。シャッター・スピードの指標の位置に注意。



写真7 エクサクタ B (type 5.2)

### イハゲーの動き —スケール・ダウン—

ドレスデンのイハゲーは、1931年に全金属製ボディのベスト判カメラ、パルヴォラを発売する(写真4)。一見、横型のカメラに見えるが、従来通りの縦型で、画面も縦位置である。ヘリコイドによる沈胴で、距離合わせと兼用する。ベスト判専用に加えて、プレート(名刺判)兼用(写真5)があり、後にベスト半截判も発売された(写真6)。

ベスト半截判は、フルサイズと違い、立ち姿は横型で画面は縦位置である。イハゲーは、半截判については慎重で、半截判のカメラはこのパルヴォラが唯一無二であろう。

なお、カメラ本来の立ち姿が横なのか縦なのかを見分けるには、リーフシャッターでは、シャッター・スピードの指標の位置を見ればよい。12時の方向が「天」である。

エクサクタは、1933年ライプツヒ春の見本市に登場する。全金属ボディのベスト判一眼レフ(写真7)で、後に多目的カメラとして一世を風靡するキネ・エクサクタの露払いとして登場する。沈胴と距離合わせを兼ねたヘリコイドと、裏蓋に仕掛けられたロールフィルム・プレート兼用方式がパルヴォラから引き継がれた。

シネ倍判のキネ・エクサクタは、エクサクタをスケール・ダウンしたもので、1936年に発表された(写真8)。外観も内部機構もエクサクタを踏襲していて、大きさの違いこそあるが、それ以外はスプロケットによる自動巻き止めの追加、内蔵ヘリコイドの撤去などに止まる。

### ヴィルギンの動き —スケール・アップ—

ウィースバーデンのヴィルギンは、1932年に全金属製ボディを持つ半截判のゲヴィレットを発売する。立ち姿は横長で画面は縦位置である。従って、人物撮影には扱いやすい。このカメラには4つのモデル(写真9~12)が知られている。

ヴィルギンは、35mmに進出する際に思い切った手法を採用する。ゲヴィレットのボディをベースにし、高さ、奥行き(厚さ)を変えずに横幅だけを広げ、画面サイズの変更とスプロケットの挿入場所を確保した。しかし、このままでは、パトローネが入らない。そこでパトローネ室だけを膨らませて収容できるよう改良した。この形状はユニークで、当時追従するものはなかったが、近年の一眼レフではグリップとしてあるいは電池収容の場所として再現されている。

ボディの厚さを変えなかったのは、レンズ・シャッター・アッセンブリを共用するためである。



写真8 キネ・エクサクタ

る。しかし、パトローネ室を膨らませたために、フランジの一部をカットせざるを得なかった。こうして開発されたエディネックスは、1935年に発売された。ここに使われたアッセンブリは、ゲヴィレットの第四世代にも流用されている。従って、ゲヴィレットの第四世代は1935年以降の発売と見て間違いはない。



写真13 エディネックスのボトム・ビューとゲヴィレットのトップ・ビュー。エディネックスのボトムプレートとゲヴィレットのトッププレートと取り外し並べると共通点がよく解る。



写真9 最初期型:ファインダーはトッププレート中央にある。シャッターは、ダイヤルセットのフロント。レンズはラジオナーF2.9/50mm。トッププレート、ボトムプレート、沈胴式の鏡胴は共に黒色塗装。(McKeown's Cameras 2001-2002より転載)



写真10 第二世代:アクセサリー・シューが追加され、ファインダーは向って右側に移動。シャッターはリムセットのコンパー。(McKeown's Cameras 2001-2002より転載)



写真11 第三世代:レンズ・シャッター部に引き出し用のつまみが追加された。鏡胴部がニッケル鍍金にかわった。鏡胴部を引き出すと、定位置で自動ロックされる。



写真12 第四世代:トッププレート、ボトムプレートがニッケル鍍金になった。鏡胴の構造が改められ、フランジの切欠きは上下の他に左側が加わった。

ゲヴィレットやエディネックスのボディ・シェルはどのような技術で製造されたのだろうか。当時の最先端技術であるアルミニウムの「押し出し成型」が使われた可能性が高い。特にエディネックスのボディ・シェルは他の方法は考えつかない。

ヴィルギンの所在地であるヴィースバーデンは、ヘッセン州の州都でフランクフルト・アム・マインに次ぐ第二の都市である。マイン川とライン川の合流点に位置し、河川交通の要衝である。ローマ時代から温泉で栄えた街で、地名は草原の中の温泉と言う意味のヴィースバーダに由来する。州都であるヴィースバーデンや州最大の都市であるフランクフルト・アム・マイン周辺に、押し出し成型のできる工場があったとしても不思議ではないだろう。

押し出し成型のボディシェルを持つライカを生産したライツは、同じヘッセン州ギーセン郡ヴェッツラーにある。ヴェッツラーはヴィースバーデンの北北東約50kmにあり、交流があったことは否定できない。押し出し成型ができる工場はどこにでもあるわけではないので、両社が同じ工場に製造を依頼していたことも考えられる。



写真14 エディネックスのトッププレート。  
中央にあるのがフォコスのソケット。

ライツとヴィルギンとの密接な関係は、ボディシェルの製法だけではなく、エディネックスのトッププレートに証拠が残されている。左から巻き上げノブ、巻き止め解除のディスク、フィルム・カウンター、一つ飛んでファインダー、巻き戻し切り替えディスク、巻き戻しノブと続く。ゲヴィレットで追加したアクセサリ・シューが見当たらずその代わりに煙突のような円筒が中央付近にある。ここには、ライツがスタンダード用に開発した単独距離計フォコスが取付けられる。エディネックスのトッププレートには搭載するものが多くあり、アクセサリ・シューを取り付ける場所がなくなったための苦肉の策だったのかも知れない。いずれにしても、ライツとヴィルギンとは、取引

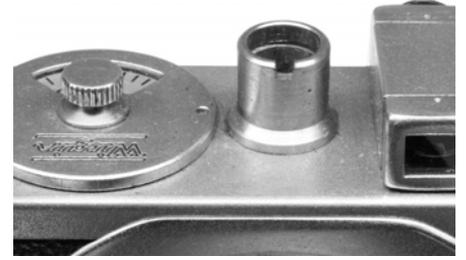


写真15 ソケット クローズアップ。

関係にあったことの証拠である。さて、エディネックスを初めて見たときに気になったのは、ライカ250型(レポーター)との関係である。このカメラの試作は1933年で、エディネックスの発売は1935年であるから、その影響を受けたと考えるても時間的矛盾は生じない。ライカスタンダード型の発売は1932年で、この型のために開発したフォコスの時系列関係にも矛盾は生じない。この二社間には深い繋がりがあったと読み取れる。

最後に付け加えるとすれば、レポーターという名称である。ゲヴィレットはレポーターの別名でも売られていた。これだけは、ライツよりヴィルギンのほうが早かった。

(FIN)